

# ミオヤの光 不斷光の卷

不斷光	二	不斷光の要素	二五
三善道	三	神聖	二六
靈的性格	四	靈性と人生	三〇
不斷の注意	七	眞實は人の本分	三二
不斷の基礎	八	眞實の利益	三八
成功は不斷光の結果	一〇	不斷眞實	三九
不斷の練習	一一	眞の勇氣は神聖也	四一
不斷の決心	一二	眞實の不斷光	四二
光明と鍛練	一四	不斷光の正義	四三
不斷と中庸	一七	消極的不斷光	四五
不斷光は充實する力	二〇	眞勇	四六
至善は意志の目的	二一	克己の終局	四八
心靈と氣質	二三		

## 不斷光(人の意志を靈化する)

人の精神活動の意志なるものは不識と意識とを論せず、常恒不斷に相續して一にあらず異にあらず、人の心意は常住不動の如くに觀ゆれども實は然らず。形式は常に一なる如くなるも内容は不斷に新陳代謝して常に非ず、然れども其の展轉變易實に微細にして常に一定なるが如くに觀ゆるは宛かも水の滔々たる常恒一體の如くにして而も異なるが如し。然れば經に、人一日一夜の中に八億四千の念ありと。

常恒不斷の活動せる心意を自由に統御して一定せる目的に向つて進行せしめて横専放肆ならしめず、不斷の活動を至善に向はしむるものは如來の不斷光なり。

一日一夜八億の活動を盲目的に動くものは即ち三惡四趣に趣向する心意なり。意志の常恒不斷なる活動に對する原動力の故に不斷光とは名づく。不斷光の性質を分析すれば如來の神聖正義恩寵の三要素より成れる靈光にして人の

意志を靈化して聖靈の無上菩提心即ち靈的道德心として靈的活動をなさしむるの力也。意志の信仰は如來の聖光によりて靈化すること、之を世間に云はゞ意志を鍛鍊して自由意志を以て高等なる道德心を修養するの謂に外ならず。

光明なき意志の盲動に二種あり。善と惡と是なり。眞理の光明なき意志はたとひ他に害を與ふる不道德罪惡とまでに至らざるも、宗教的に云はゞ光明なき無明の心意が神の目的を目的とせざる無明より盲動する心意が偶然に善に相應するが故に惡と云はず、善と稱するも眞の至善に非ず、此の無明の動機より出づる善惡を各三等に分ち之を三善道三惡道とす。

人の意志性格が善惡の習慣力に由て或は惡に傾向せると善に向けると其の善惡の意志の發達程度に於て各三等あり。

其の性格意志が邪惡にして其の動機より念々邪惡の心念を衝動し肉欲我欲の最も重きより、日々八億の念を焰々として胸中より吐き出して之を語と行爲とに惡業を積累するに至るは地獄的意志とす。

次に肉欲我欲の我意的動機の已に病的となりて盲動し八億の念々に餓鬼の業を造作するは餓鬼的意志なり。

盲目的意志に因果の理を信せず。肉體あるを知つて精神あるを信せず。唯肉の幸福をのみ希望し心靈の幸福を求めず。今日の快樂を追求して明日の活計を圖らず。愚痴盲目的生活に安んずるは即ち畜生の意志性格なり。

斯の三類の意志動機より日々八億の念々意志活動が三惡道を作る。

## 三善道動機

人の意志性格道德の動機に數多の階級あり。道德的動機の最下等なるは傲慢を本とし勝作的動機より名聞の爲に善を作すも其の意志より觀る時は未だ正善なりと云ふ可からず。名聞の善勝作的意志より起すが故に。僞善亦道德なり。斯かる動機より八億

の念々三業を動作するものは修羅の意志とす。

人的動機。世俗的情操所謂普通の人情義理てふ動機から世間的道德浮き世の務として又其の風俗習慣に規定せられたる良心の動機より惡を避けて道德的行爲をなすは人間のなり。其より八億念々人間を造り出す意志なり。

天道的動機。世間の人情義理の制裁によりて道德をなすに非ず。自然天真の爛漫たる良心より又天道を怖れ天の萬物を恵むが如く自然の理に本づきて道德の動機として愈々善の三業を動作するは即ち天道的動機とす。

斯の三類は進んで靈の光明を得るに非ざれば其の意志靈的光明たらざれども世間的自然的の道德意志なり。故に三善道の意志的性格とす。

### 靈的性格

聲聞と緣覺との道德。聲聞的道德とは已に靈光を得たる意志なるも消極的にして、天然を超え世間的道德を超えて如來の光明に靈化せられたるも空の一端に執して未だ如來の不斷光に積極的の靈能あるを知らず。

自ら高く物表に出で其の無我真空の靈的意志は超然として真天に輝き、我慾肉慾の影だにもなく、其の節操の高潔なる其の戒徳の凜冽なる、玲瓏たる明月の青天に輝くが如く、然れども無意的にして積極的の道德無上道心を以て一切衆生を攝化して自己と同じく大菩提を得せしめんとする靈的道心なし。

菩薩の意志は如來の不斷光を以て自己の靈的意志として不斷光の無盡の聖靈的原動力より人の意志を動機として高等なる道德心として活動する意志なり。

菩薩的道德とは前の惡衝動の意志を脱却し即ち肉慾我慾の動機を離れ世俗的情操世間の義理や人情から起る志操に非ず。又天真爛漫の美しき道德心にもあらず。又二乗の靈的利己主義の偏執なるにもあらず。ゾントが道德心の動機に最も低等なるは世の法律とか世間の排斥を怖れて惡を制裁するは下等、次に他人の良心に照さるる事を怖

れ又教育の修身に本づきて三業を制裁して道德の動機となるは其の上なり。世の良心に制裁せられて道德をなすは第三なり。高等なる理想我より自律的に善をするは最高等なる道德的動機なりと。

今菩薩の道德とは最高等なる道德的動機なり。

斯靈的の道德的意志は不斷光の勢力が人の意志として顯現するを以て如來の無上菩提心が法界に周遍して一切を向上發展せしめて最終の目的なる神の至善に歸趣せしめ、此法界周遍の大道力が人の意志に實現して不斷の道德的活動をなすにあり。

不斷光の本體は法界周遍にして又人の意志に實現して不斷の靈的活動となる。

斯不斷光と一致せる意志は大菩提心なり。菩提心は高等の道德心にして劣等なる我意感情を制して自由ならしむる意志なり。

斯光は善惡を双照し、惡は目的に背くが故に排除し善は如來の目的に隨順するが故に善に進む。之によりて自由意志あり。

### 不斷の注意

不斷光は人の意志に對して心靈を照す。自己の熟考となり周到緻密の注意は人の意志に現る、不斷光なり。人未だ斯光に靈化せず盲目的に意志を活動するが故に貪瞋嫉憎等と發動す。此が爲に終身相復す可からざる弊を作るに至る如きは蓋し不斷に活動する心意の緊密なる注意缺乏すればなり。注意の缺乏したる時に忽ちに感情は逸して專横に盲動す。是失敗の原因なり。然れども其の根底を探る時は全く平生不斷の意志を統御すべき光なきが故なり。不斷の光が嚴密なる注意として自己を返照せば道德的行爲に於て躓きはせまじきものを。

不斷光の要素たる神聖の光が人の意志を照して、我意罪惡が我を汚して闇黒に誘引する結果の實に恐るべきを先見する事あらば背くまじきものなるにと。

自己の意志を統御すべき心靈は即ち如來の神聖の光によりて理性の光として自己の

すべての精神活動を統御するものなり。常恒不斷に自我の光明昭々として照らし、神聖にして侵す可からざる統治の有るあらば一個人の政治は能く治まりて常に平和にして闘争は有るまじきものを。人の心意は常に不斷に活動し念々生滅して間斷あることなし。外界には心を刺戟して感覺あり又罪惡に誘惑するの機會充滿せり。最も鞏固にして不斷に注意の光を以て不斷の念々を照して之を統べて善道に向はするに非ざれば端なくも或は感覺の妄塵に染汚せられ又は三惡四趣の意志に迷惑して靈的聖道を失ふの憂なきを保せず。之に對して向上の進路を照すものは不斷光の注意力也。

## 不斷の基礎

人の精神は常恒不斷の活動にして生滅變易常なき心意が一定せる目的に達せんと欲せば其の根底を鞏固にせざる可からず。例へば大厦大建築物を建設せんと欲するには其の表面に現はれざる處の基礎を堅牢にせざる可からず。人世に立つて一事業を成功せんとすれば必ず其の意志の根底を鞏固にすべし。

然るに人心殆し。人の心念は念々に生滅し刹那々に異變す。自己の意志已上に其の基礎を立つべし。即ち家屋は建築の地ぎやうか地盤から築き立つる時は傾動の怖なきが如く、人の心意の根底は一大心靈なる如來の常恒不動の大聖意に依つて之を基礎とすべし。如來不斷光の要素たる神聖眞理にして眞理は永久不動の理性なり。人は自己の心念無常遷流の頼む可からざるを自覺し、又我なるものは自分勝手なれば自己の都合によりて轉變するものなり。己が意に適すれば非理なる事にも是認し、己が意に適せざる時は理ある事をも指斥す。如來は眞理の本なれば眞理の光明が不斷に自我を照見する事を知る時は他人の是をも自己の非をも誤りなく知見し、基礎たる如來の神聖の光明に由て自己を返照して常に自他に對す。又時間的にも人の心意は念々に生滅し今年の我は去年の我に非ず。順境の我と逆境に立ちたる我とを異にし、成功の朝の我と失敗の夕の我は異なるの我の觀あり。己を判斷する我と他人を批判する

八

九

我とを全く同じきにあらざるは蓋し無常遷流の心念たる我なり。此の生滅常なき我を基礎とする時は人心是殆しである。然れども此根底なる大我即ち如來の永久不動の眞理より不斷の光明を以て我意志の基礎とし、此の不斷の光明を意志の根底として我を統御し我を指導し我を判斷し我生命とし我活動とする時は我益々向上し終局に趣く處必ず至善ならん。

## 成功は不斷光の活動の結果

世に偶々偶然にも貧兒より一躍して巨萬の産を作り一世に豪商の名聲を赫々たらしむるあれば我も亦彼の如くに僥倖を得まほしく希ふものあり。之を羨望し自己も恣る幸運を得んと希ふは甚だ非なり。

抑も他人の成功は偶然の結果にあらず。人事如何に聊少の事たりとも其の原因なき結果あらじ。苟も一事業に就きて成功せんと欲すれば必ず其の意志に於て其の目的に向つて不斷の意志力を以て不斷の光と不斷の熟考と不斷の意力を之に注ぐにあらざれば成り難し。

人は意志の散漫横恣私慾の盲動に結果の實を得る事有らんや。見よ農家の田園漫生の雜草恣に蔓繁せば如何なる沃地たるも恣る田園に善果を收穫する事あらんや。

米果の如く人を裨益する草實は耕耘播種栽培の丹誠なる結果ならざるなし。人苟くも自己の目的を成し成功して功遂げ名を成すに皆不斷の意志力を自己の目的に向つて用ひたる結果ならざるなし。

人の心意は甚だ御し難し。漫りに感覺亦感情の爲に動かされて之に盲動せば何事にか成功の望あらん。不斷の活動と云ふも目的に向つて光明ある不斷の活動にして一定の目的に向ひ、之を障礙する處の一切の妨害を排除して専心無二に一の事業に不斷の意志を注ぎ、此には殆んど名狀す可らざる苦心辛勞苦難を経た始めて之に達すべきものなり。經に「心を一處に制する時は事として辨せざるなし」他人の成功談を聞き

一〇

一一

一時の感情の爲に煽動せられて自己の成功を望む如きは成功不可能なり。不斷の意志は決して表面にあらはさずして深き意志の内面に活動する不斷の意志力こそ頓て一大事業を成功せしむる原因なり。若しくは政治家又は宗教家又は實行家等その何たるを問はず各其事業の爲其目的の爲に不斷の意志を専ら此に注ぎ之を修めこの目的を達せざれば寧ろ休まずとの大決心を要す。

### 不斷の發展不斷の建造不斷の練修

宗教の靈的意志を成さんが爲には不斷光の觀念念々に離れず、常恒不斷心念工夫を凝らし不斷の修養は自己の意志を靈化するの第一義なり。若し心に間斷ある時は成功しがたし。

### 不斷の決心

人の意志の決定は未だ光明なき決心は盲目的にして自らは是と認めたるも若し不斷光によりて自己を返照する時は昨日の是は今日の非と明らむ。斯る決心は其結果如何を自問自答して既往の非を自覺したので自己の決心は動かさざるを得ず。決心は不斷の意志の修練によりて成立し、決心已に立つ時は其決心より發する意志は不斷に其の決心に隨順す。自己の決心は自己の心の恒にして不斷即ち平生の決心なり。

光明中の決心は闇の意志に破らるゝものにあらず。盲目的意志決定は必ず光明の爲に破らる。

意志薄弱なる人は自ら決心する事に躊躇す。自ら決心する事能はざるものは何ぞや。意志の鍛錬未熟なるによる。

意志の鍛錬は即ち不斷光なり。此不斷光と一致する意志は鞏固なるが故に眞勇氣なるが故に決心明了なり。

決心の自ら判然たると否とは不斷光を得ると否とにあり。他に原因あるなし。

意志の不斷光は吾人が運命を左右する原因なり。

### 光明と鍛錬

意志は常恒不斷の活動的心用とすれば、不識的なると意識的なるに拘らず意志に離れる心あることなし。故に不斷なり。

此の不斷の意志に盲動と明動とあり。盲動とは不識的意志を云ふにあらず。理性の光明を離れたる意志の活動なり。意志の鍛錬とは意志に不斷の光明を得るにあり。人の品性も人格も此光の光動と盲動との如何による。

たとひ如何によく働くと私慾肉慾の盲欲の動機によりて働くものは高等なる人格と云ふ事を得べけんや。

人格も品性も成功も自治も鍛錬せる意志即ち不斷光的活動の結果に外ならず。

人の人格成功等が表面に現るるに就ては其裏面に常恒不斷永へに燃えつゝある意志の光が離る可からず。

不斷よく熟し不斷の光にして常へに意志に輝く時は自由自在に之を操縦し其の便宜に隨て機に臨み變に應じて無碍自在を得べし。

意志の鍛錬即ち精神の光、明なるが故に、斯光明加はらんか、如何なる危機に處するも身を誤る如きの虞なし。

此光明は自我が肉慾を支配するが故に肉我は如何なる危機に際しても身を誤るの恐れなく又失意の境に立つとも失望落膽の場合にも自ら悲に沈淪する事なく、たとひ艱難辛苦に會ふとも自ら昏迷して爲すを知らざる如きの愚を演ずる無きに至るは何ぞや。斯光は人の精神の眞なる眞我を喚起し眞我が能く我を保護し大に慰藉を興へ又眞我が肉我を指導して常に善道に導く。自己を反省して禍を轉じて福となし暗中に一道の光を興ふるものは不斷光なり。

意志の鍛錬と云ふことと不斷光に靈化すと云ふことは同一なれども、宗教的に云は

ば靈化と云ふ。

不斷光は益々鍛練すれば彌々意志の緻密となる。其鍛練と不斷との精神状態を物理的に例せば、一切の物質には分子と分子との空隙あり、彼の鐵の如き鐵は至つて其相抱合せる空隙粗大なれども鍛練して緻密を除去するに隨つて益々緻密なり。能く鍛練したる鐵が名劍と成る如く、之を意志の鍛練益々進む時は意志の活動間斷なく光明態となる。其の分子の抱合最も緻密なるは白金黄金等なり。其の密接の度に隨つて又光澤度も強し。人の意志空隙なき光 明は其精神道德的 光明として神聖優す可らざる精神態となるなり。

何人も道德意志なきにあらず。然れども横恣散漫にして私慾の爲に塞閉せられて靈光に間斷の度大なれば遂に平生精神をして盲動せしめて其の習慣が竟に光明を覆ふ。人に賢と思と分るゝ所以は光明的意志の不斷と間斷の度の如何に由るのみ。凡人と雖も光明的意志無きに非ず。

然れどもまことに間斷ばかりにして忽ちに闇となる。八億念々の中に光明生活は少時にして千分の一にして餘は盲動なり。賢人は光明に空隙の少なきなり。

人格の圓滿と圓滿を缺くと云ふも亦然り。能く意志の鍛練よく成熟せる人は意志が空間的に空隙なき光明 明あるものなり。

意志が空間と時間とに於て間斷なき靈光熾然たるものは賢人なり。盲動なるは愚人なり。禪に正念相續と云ふは意志不斷光なれとの義なり。念佛念々不捨離、憶念不斷と云ふも不斷の意志ならしむるためなり。

意志の空間的 光明の圓滿とは慈悲、智慧、安忍、克己、剛毅等の諸の道德の完全なるを云ふ。或は智慧あれども慈悲を缺き剛毅にして忍辱をなすこと能はざる如し。

凡ての道德に於て缺乏なきを空間的の間斷なきものと云ふ。平生是道とは不斷光意志に常に輝きつゝある時平生是道なり。

## 不斷光と中庸

一七

一六

世に賢人と愚人と、君子と小人との分るゝ所以のものは意志活動の盲動と明動との別なるによる。人一日一夜八億の念あり。小人と雖も道德的 光明の意志に發せざるはなからん。然れども是電光の如く暫時にして忽ちに消失す。八億の念々を常恒に照して太陽の如くなるは即ち不斷光に由て活動する意志なり。念々常に滔々と清澄なる泉の流出するは君子なり。濁水ならば小人なり。

全く不斷光が自己の意志的に能動的に發動するに非ざれば眞の不斷光の意志にあらす。例へば他人の德行光輝赫々たるの名譽を稱せらるゝを聞いて、己も亦同じく名譽を貪るが爲に一時感情を起し又他人の勝れたるを羨んで一時の勉強を急に思ひ立つときは決して自己の意志不斷光にあらざるなり。

不斷光は自己の眞髓意志より能動的に活動する義なり。謂ゆる中庸偏よらず。倚ならざるなり。或時は畏懼すべき君子たる如く或時は卑賤すべき小人たる如きは全く意志の統一を缺きたるなり。不斷光無きが故なり。又己が情に適ふ人に對しては情に適應せざる人に對すると其妻色を異にする如きは是感情の爲に意志の中庸を奪はれたるものなり。

中庸に、爵祿をも辭すべし白刃をも踏むべし中庸をば能くすべからずと。人は一時の感情にて如何なる名譽をも爵位をも勳賞をも感情興奮せる時は之を辭する事もあるべし。亦白刃及石火の下をも取て恐れざる事もあるべし。然れども此等は唯一時の感情の興奮が動機となりて敢爲せん事なれば是れ平生の事に非ず。人は平生不斷に冷靜なる意志より活動せるに非ざれば中庸なる事能はず。過不及なき中庸は即ち不斷光の意志活動なり。

意志は中庸なれ。大敵にも恐るゝ勿れ。小敵を侮る勿れ。外界の刺戟の爲に働かざる勿れ。不斷中庸なれ。

意志鍛練する時は外界の刺戟に對して驚動せられず。誘惑せられず。君子の中庸に安立するは是不斷光の賜なり。

一九

一八

### 不斷光は充實する力

人の心意の勢力は不斷活動なる意志の力なり。能動的に此不斷活動の意力を積累する時は非常の心力を起す。喩へば蒸氣力充實するが如く精神一到何事か成らざらん。不斷意志力の不撓不斷勇猛進趣あらば如何なる事業か成就せざるべきぞ。西哲が「意志力は萬能なり。以て金鐵をも破る可く以て山岳を動かすに足る可く、以て人心を感激驚動せしむるに足る可し。たとひ天地に隆替あるも意志の力は三軍の力も以て奪ふ事能はず。あらゆる人間社會の成敗の動機は一として茲に萌芽せざるものなし」と。意志をして最も不斷密嚴なる力を充實せしめて一毫の間斷なく金剛の如くに鞏固ならしむる時は金鐵をも碎くべし。火も燒く事能はず、水も漂す事能はず、刀刃も割る事能はずとは是意志の金剛の如くに鞏固になりし時なり。關將軍が一たび怒奮を發して叱咤する時百萬の軍勢一時に破るとは最も不斷の意志が最も牢強に集中したる力なり。軍人が彈雨の中に立て彈丸も能く射る事能はざるは意力の不斷に由りたる効果なり。念力強盛と云ふは同じく意志の不斷に密接したる力なり。

不斷の意志力を一時に集中する時は非常なる力となり平生不斷に活動しては中庸となり。平生不斷は沈着にして非常の不斷力は鞏固に凝結して金剛の如く空隙なき故に非常の場合には非常の意志を凝結し平生には常恒に空隙なき注意力思慮周到なる意志の力となりて目的の正確を得せしむ。是不斷光の意志に充實すればなり。

### 至善に到達するは意志の目的

人生終局の目的は圓滿なる人格至善に到達するにあり。圓滿なる人格は佛陀是なり。至善の極は極樂是なり。然らば人は何を修して圓滿なる人格佛陀と成り至善なる安寧國に到達する事を得るや。

圓滿なる人格とは最も能く意志の鍛練意志の光明赫赫として間斷なく中正を得た

る人を聖人と云ふ。人は生れ稟けたる資性天稟にして其の天賦の器相同じからざるにもせよ、各自は自己の資性を圓滿に完全に發達し遺憾なきまで實行して其の天分を全うし全力を盡して已らば足れり。人已が天稟を完全に鍛練し圓滿に發達し天分を盡す時は佛子たり、菩薩たり。水晶は水晶の性を顯はし金剛石は金剛石たる資性を顯はすべし。強いて水晶を琢磨して金剛石と爲せと云ふの謂にあらす。

世に各自の意志即ち道德意志を完全に鍛練して其人としての天分を盡したるものは圓滿なる人格なり。

人世に惡人と目せられ情弱者と名づけらるゝ人にも精神の奥室には當に光を放たんとする靈性の伏藏するあらん。之を佛性と曰ふ。斯性能を有し乍ら自ら之を開發し光輝を赫々たらしめ光明を活動するの意志なき者は實に是罪人たり。苟も常識を備ふ可き資性ある上は自己の資性を完全に發展し天分を盡すの志なかるべからず。光明教會が世人を勸告する事は各自の伏藏奥室を開發し全力を盡して倒れて止まんとまでの意志を立てよと云ふにあり。是苟も佛性を具備して人間と生れたる第一の本務なり。斯人生の本務人間としての天分盡さずして可ならんや。此本務を盡すの第一要件は意志の奥なる心靈の光明を以て凡ての意志活動を偏邪を去り中正を得て益向上し至善に向ひ其天分を盡すにあり。斯意志をして目的を達せしむるものは不斷光なり。汝が意志、何に對しても不斷光を以て注意せよ、時間的にも不斷に熟考せよ。

### 心靈と氣質

不斷光に平生と非常との別あり。平生には不斷の光意志即ち本心の光能く自己の氣質を返照し自己の氣質の偏執を自覺す。此偏執を固守するものは全く鍛練の足らざるものなり。

能く志氣をして偏執して中庸を失ひ亦時間的に或時は物に熱中し或時は冷却し心意中庸を得ざるは未だ鍛練足らず、本心の光なく唯形氣の質に一任するが故なり。人心

是殆とは氣質に偏するが故なり。

人形氣の質なるものは若しくは遺傳的に又は習慣の力よりして其の人々の氣質に稟けたるもの各相同じからず。或は貪戾なるあり、又物に凝結せるあり、陽氣なるあり、陰氣なるあり、急性なるあり、緩性なるあり。各自其の偏倚せるありて天性の自己の偏執は自ら弱點たるを自覺して之を陶汰して而して後初めて中庸を得るなり。高等なる人格と爲るべき事を知らず、自己の稟けたる偏執は自己の氣質に一任する時は益々偏執の習慣となりて氣質の爲に中庸を失ふ。本心の光明によりて偏を去り中を得、邪を除き正に復す。此中正を得て平生中庸を得たるものは本心の不斷光なり。氣質は偏執あるが故に或事には熱中し或事には冷淡にして自己の氣に適する人ば偏愛し適せざる人ば憎惡す、本心光中正を得る時は偏執の失に陥る事なし。

中正を得ざるものは圓滿なる人格たる能はず。不斷光は聖靈が偏邪を去りて中正の意志として不斷に靈的活動し自己を正し又他を正しうするにあり。

### 不斷光の要素

不斷光は如來が衆生の意志を靈化する心光なりとすれば其要素は如何。即ち物質的の日光に光熱化の三能あるが如く如來の心光にも智慧と慈悲と靈化の三要素ありて人の意志に理性の光を興へ氣質の垢を脱却し靈的活動の原動力と爲る所以のものは即ち如來の神聖と正義と恩寵との三要素是なり。神聖は如來が行爲を照す智慧の光、明にして真理を悟らしむ。智慧即ち實行を照す智慧なり。人の良心と實現して自律的に邪惡を排きて正善に向はしむ。正義は中正公明にして偏邪と惡非を斥けて正善に向ひ、如來正義の光によりて向上至善に到達するの勢力なり。吾人は神聖正義の光に由て自ら正善に進行むべき本務あるも如何せん肉我は私慾に覆はれ煩惱に惱まされて是折角の人界に生を受けたる甲斐もなし。墮落の淵に沈み三惡に淪まん事寔に淺ましきことなり。愆る漢には如來の神聖の光も正義の明も菩提の目足なきものには何ともする能

はず。焉に於てか如來の大慈、子を憐むの慈悲よりして吾人の靈を回復し圓滿なる人格とするは如來の恩寵なり。恩寵とは親が子に對する愛の如し。親が子を養育する如く人の心靈を開發し靈育するものなり。

神聖は不斷の光明、正義は不斷の勢力、恩寵は不斷の靈的活動の原動力にして此三要素を以て不斷の靈動の本なり。

### 神聖

如來は神聖にして吾人の意志即ち行爲の指導者にして吾人が實行の正道を知見せしむるものなり。

如來の神聖は眞理の光なるを以て眞理には無上の權理ありて何人も眞理の命令には服せざる可からざるものなり。

眞理は永遠の光にして萬物は眞實にあらす、眞理は萬物の上に超然として輝き萬物は眞理の光明に由て在るなり。眞理の光が人の心靈に在りては不斷の活動に正道を與へて誤らず終局の目的なる涅槃に導くものなり。

人は無明の盲動によりて一切の行爲幻妄迷謬虚偽の誇張の言語等を以て己が心を汚し人格を破り品性を汚し德行を害し三惡六動に迷没せしむるものは無明妄動なり。此に由つて因縁相待つて生死に流轉し迷没を出る能はず。

無明妄動は虚偽自ら欺き自ら賊ひて惡道に墮落せしむ。眞理の光は如來の實踐を照す智慧光なり。此光によりて人の至誠眞實心を開現し無明の眠醒めて眞理の日は永へに照せり。

眞理は普遍的の道德律の本源にして自らを律するのみにあらずすべての人をも眞理の標準によりて律すことを得。如來は眞理の源にして眞理を體得し此眞理と一致したる人は皆佛陀なり。聖者なり。斯光を知らずして無明妄動の生存をなすものは凡夫なり。

此神聖なる真理の光は人の行為に對して八正道を得べき處の光明にして是道徳を自律的に導く處の本尊なり。

戒律は自律あり他律あり。自律とは世間の法律とか又は世間の制裁に由らざるも自ら神聖なる光を標準として諸惡は真理に背くが故に自ら制止し、衆善は真理に順するが故に自ら進んで此標準に隨ふ時は自ら自己の靈性を清淨にし真理の光を自性に顯さんが爲に自己を律す。是諸佛の真理に準ずるの誠なり。

自己の心性を汚すものは他人の預る處にあらず。自己自ら自己の靈性を汚す。自己を賊するものは即ち自己なり。自ら欺き自ら墮するは是誰の過ぞや。

如來は真理の源にして而も真理の終局なり。故に如來の目的に隨つて圓滿なる人格を得。最終の至善に到らんと欲せば其の真理の光明を標準として己を律すべし。世は無明なり。我を欺惑し我を闇黒汚惡の獄中に陥らしめんとするの動機は世に充滿せり。我が眼と耳と口腹との欲よりして我を迷はして墮さんとし又我執、情慾、惡念、惡見の魔網に懸つて品性を零落せしめんとす。

### 靈性と人性

人は深奥の意義より云はば成佛すべき靈性即ち如來の子なり。精神の奥に神聖侵す可らざる靈性光を放てり。然れども全體より云はゞ生理の欲に充されたる動物なり。能ふ限りは唯肉慾我慾を目的とし永遠の生命をも真理の光をも顧みず唯現世の慾を恣にせんとするにあり。

人に眞實と虚偽とあり。人の虚偽を爲す所以は靈我と肉我との二面あり。靈我は木より眞實にして自ら昭々として善の稱すべく惡の賤しむべきを自覺せり。自我が罪惡を自ら賤しむべきを知り乍ら自ら肉我我慾を制止する事能はずして自ら寛容す。爲すべからざる事を犯す時自己を制する事能はざれば無能の毀りを恐れて自己の非を覆ひ隠さんが爲に虚偽をなす。若し人にして善惡是非を判斷し識別するの智なからんか、

惡魔の惡を犯すも自ら慚愧なく又隠覆するの要なし。故に謂ふ、純靈性なる聖人と純動物の意志なるものとは虚偽あるなし。聖人は靈性の光明によりて己を照し惡及不道徳ある事なし。故に惡を隠蔽するの要なし。又純動物の意志の者は自己の理性なきが故に自己の非惡を慚愧するの智性なく唯本能的に生理的に飲食し惡を作す。他に害を興ふるも自ら之を惡たるを意識し分別するの理性なきものは自ら非を隠すの虚偽なり。獸類の如きは虚偽なきなり。善惡邪正を識別するの理性と動物慾の性と兩性を具しながら理性が動物我を制止するの力なきものにして始めて虚偽あり。

自己を制止するの勇なきを自ら慚ぢて之を他人に隠蔽するが爲に虚偽と爲る。或は又何にしてみてもすべての非惡は己が私慾を制止するの意力なきが致す處なり。理性は之を自ら非惡と認識するが故に他人に對して偽るなり若し全く自ら行為に於て非惡なるを認識する事なければ之を隠蔽するの理なし。然る時は虚偽とすべきなし。

又自ら内に實徳なく虚名を貪り利養を釣らんが爲に虚飾して自ら偽善偽徳を衒ふ如きは是全く無明の致す所なり。虚偽の思想誇張の言語、幻妄迷謬は肉我の迷より致す所なり。肉我は本假りに有りて真理なるものにあらず。故に肉我は肉身と共に滅亡に歸せざるを得ず。必ず滅亡に歸すべき運命を有せる肉我が虚飾せんが爲に虚偽の思想と誇張の言語とあり。諸の幻妄迷謬の甚しきなり。一切の罪惡は此迷謬より生ず。永遠に生存して常へに滅せざるものは眞理なり。

神聖の眞理を得たる人の至誠心は即ち如來心なり。是の至誠心のみ如來心と相應す眞理の基礎の上に立てたる建物は大理石を礎とするが故に永久に傾向する事なし。虚偽の上に立てたる家屋は如何に誇張の言語虚構如何に巧妙なるも久しからずして傾き倒れん。如何に巧みにあやつり巧言令色人をして甘心せしむるの妙術を得たるも金銀を鏝めたる建物の如くにきらびやかなるも、眞實の礎なきものは一として倒覆せざるはなし。



汝が佛性自然より出たる思想と、言語とは雪の皎々たる如くに清かりしなり。至誠心より不斷に流れ出づる泉の言語は清く潔く質直と端正にして最清に衆人、是を飲料水其他凡てに用ふることを得べし。虚偽の濁心より流れる水はすべてに用ふる事を得ず。

不斷の意志にして正直誠實の缺くるあらば自ら詭曲となりて品性は卑劣に陥り思想は淺劣となりてつひに生きくせる活氣なく清潔新鮮なる活氣なく靈氣の生命失ふべし。

人の天性の本然は詭曲虚偽なるにあらず、靈なる光なく闇黒と野卑なる意志とより私慾を恣にしながら世俗的名利を貪るよりして虚偽詭曲の卑劣なる意向となる。遂に自己を返照する光なく自己を欺き其野卑なる習慣は屢々して自ら醫す可らざる病となり、遂に天性を害ひ徳性を賊ふ。自己の本然の自性を如來の神聖真理の光によりて自性天真に立ち歸り自性の清き心より生じたる言語と行爲とを回復せんととの不斷の意志の力によりて漸々清きに復り自己の良心に返し事なく他人の良心にも愧るの色なく清白眞實の人となる事を得べし。是自己本來の面目と云ふべし。光明の眞性を顯すものは至誠心なり。光を覆ふものは虚偽なり。

### 眞實は人の本分

言語は自己の心意を他人に明す光なり。即自己精神の事實の眞相を顯すにあり。吾人は世界にあらゆる事を自ら直接に見聞すること能はず。他人の言語行爲を信じて其事實を知る。若し人眞實を言はざるのみにあらず殊更に捏造して目前を瞞着する者あり、世上之を知るも制裁を加へず。或は其虚偽を隱匿し又之を庇護するあり。世人之を知らず、損害を受けること多く、世上を大に妨害すること多し。故に事實の眞相を告げざるは人の本分を盡す能はず。

眞理の標準に順ひ眞理の光を以て自我の光明とし斯至誠心よりして發す見解は正

見なり。正見は眞理の光によりて至善の涅槃に至る正道を照すものなり。正見は眞理の標準に順ふが故に私慾幻妄迷謬虚偽の間は消滅して跡なし。故に正見は眞理を標準として至善の港に到るの燈燭なり。

眞理の標準なく正見の羅針盤なければ無明迷妄虚偽の航海は遂に我執情慾惡念の間礁の爲に惡道に沈没の憂を免れず。誠實端正は如來が人の精神に賦へたる天性なりと云べし。然るに肉我は其の私慾の私にして迷謬の魔の爲に誘はれて自己を墮落せしむ。

神聖 誠實、有のまゝ少しも構造なく虚偽なく自ら知り自ら信じたまへを語りまた實行するは易き事なれども、肉我の虚榮は還つて安きを去つて自ら難きに就き、實際に利益なき虚偽を自ら甘んずるは實に意志不斷光明なきが故に眞の勇氣沮喪し遂に世の批評を恐れ他人の攻撃を怖れ自ら躊躇して正直に直行する事能はざるは如何にも淺ましき振舞なり。眞實心のみ神聖と相應す。

如來は眞理の源なれば眞實心より生ずる事にあらざれば如來の聖光を得る事能はず。縱令口に佛名を稱へ祈禱を捧げ讃歌を奏するも其心内に眞實なきが故に其精神は如來の聖光と相背反す。斯る輩虚しく勞して得る處なし。されば聖導師は至誠心を釋して、衆生よ如來心と相應せんと欲せば身口意業の行爲必ず眞實の意志よりなせよ。外面に賢善精進の相を表して内に虚假を懷き貪嗔邪僞奸詐百端にして惡性侵めがたく毒蛇蟻に同じきは三業に於て身心を苦勵して日夜に苦勵して頭燃を炙か如くなるも雜毒の善と名く。其内心に於て毫も如來の靈なる光と相應なくんば將た何の功かあらん。唐らに勞して自己に於て益なし。如來眞理の光 明は自己の精神に於て得べきのみ斯聖光を獲得するにあらざれば祈禱其れ何の證かあらん。神聖なる光 明を得て其光明によりて自己の行爲を照らし亦他人に對するに眞實心となるべし。

眞實なき行爲は苦勵亦唐らに施すなり。至誠なき信行は勞して功果なし。譬へば山

林に松杉を植ゑんとて先づ其苗木を作らんが爲に其種子を播かんに實には松杉に非ざる似而非なる物を以て偽つて之を松杉の種子として播下し百般の苦勞を経て之を栽培の勞を經るも何の功果かあらん。信仰亦然り。至誠に真理の聖光を以て種子とし如實に之を修養するに非ずんば争でか自己の天真光明佛となる事を得ん。

### 眞 實

人として世に處するに必ず一定の法則なる可らず。道德的秩序は即ち吾人の遵奉すべきものなり。吾と人との間に行はるゝ道德の要素たる眞實は如來の眞理なるものゝ一法として此眞理の法則を守るべし。人は言語を以て自己の内心にある事を他人に表明す。他人は此言語の表明によりて自己の内容を知る。又文字により或は形容によりて自己の思想を交換する事を得。吾人は五官の事實を見聞し亦之を想像し得るのみならず。亦事實を創造するの自由を有す。自己の想像を言語文字に依て他人に表明する事を得。自己が經驗したる事實を虚構せず。有の儘に語るを眞實とし全く自ら直覺せし如くに他人に表示するものは眞實の人たり。若し然らず自ら經驗せし思想を異りたる事實を以て他人に表示する時は之を虚偽と云ふ。

言語を以て他人に表示するには事實の眞相を顯すべし。全體人間が直接の經驗は限りあり。されば他人の言語行爲を信じて知るにあらざれば人生の出來事を知るに由なし。若し人にして眞實の外虚構に出る事あらんか、吾人は誤解に陥るの恐れあり。然るに世に故意的に事實を構造して他人を瞞着する者あり、是自ら欺き他人を欺くもの也。他人それが爲に損害を被る事多く虚構者自身に取りても其眞相を暴露するに於ては信用を失ひ感情を害し事業上に妨害あらん。

眞實は人間の本分たるを盡すの道なり。

殊更に虚偽を虚構するは人間の 我の私情に出づるものなり。人には自ら善を作さざるも善の聞を好む者、虚榮と虚名を貪る情よりして虚偽をなす。人は自己の虚名好

名聞なければ發達する能はず。此情必ずしも惡なるに非ず。然れども自己が賞揚せられんが爲に膨大にし或は自己の短所缺點を隠覆する如きは甚だ非なり。尙己が名を高からしめんが爲に他人の非を揚るの傾あり。斯る弱點は人は我より已上の自我の光によりて常に己を照する明無き時は眞實を表示する能はず。

虚偽は神を欺き己を欺き亦他人を欺くが故に自ら欺く者は自ら自己の人格を重んぜざるの致す處。自ら欺く、孰か汝を信せん。虚偽は屢々する時は遂に習慣を生じて竟に全く虚偽の人となるべし。虚偽は己を染汚するもの、一切の罪惡は此腐敗せる穢物より發生す。

### 眞實の利益

眞實は我と人との間に於て表裏なく明鏡の相照す如く隠覆する處なく互に眞實を以て交誼をなすは實に如來の眞理の光明中の交なり。

此光明の中には交情は彌暖まり覆郁たる香氣百花爛漫たるあり。平和永久の平和常住の麗はしき色は眞實心よりなす。

眞實は光明虚偽は闇黒なり。眞實の光明の在る處には諸の神明と聖人との在る處、闇黒虚偽は諸の惡魔邪神の伏在する處、眞實の光明ある處は常に平和なり、諸の幸福は此に聚り虚偽闇黒の處には諸の災禍闢譯此に發す。

眞實心には世に恐怖すべきものなく眞の勇氣果斷少しも應面なく事を處す。

眞實の光の前には匹夫匹夫と雖何人も侵す可からざる勇氣あり。虚偽は高位顯官と雖も恐れなき能はず。

眞實には清淨潔白光明赫々たり、品格自ら高尚なり。

虚偽は闇黒不潔卑劣陰險小膽詐偽等の源たり。

### 不斷眞實

人の世に處するにたとひ才美なくとも然れども至誠正直は片時も缺くべからざる意志の光なり。光ある言を以て自ら信する所を語り自ら経験したる處を有のまゝの表示するあらば何人に對しても恐れ憚る處なし。平生不斷に眞實の光なしに世に處するものは實に危険なり。虚偽の成功は或は一時は隆盛を極むとも竟には信用を失ひ亡ぶに至るべし。

人は才智鋭利ならざるも奮闘の勇氣なくも誠實正直を以て貫くの意志あらば必ず如何なる物事にも恐れなき勇氣は生せん。

虚偽は眞理の光の前には價值なし。たとひ僥倖を得て人を欺き一時の成功をなすも自ら省るには何の貴かあらん。静かなる夜の人眠に静まる時に自己の爲し來る事を神聖なる光明の前に點檢し來らば如何。自ら責め己を悶へしむる棒は良心より戴かざるを得ざるべし。

自己の精神生命を不斷に永續し益々靈的生命を相續ならしむるものは眞實なり。

### 眞の勇氣は神聖なり

神を畏れず、人の前を畏るゝものは事實を表示するの眞勇氣なり。眞に神の光を畏るゝものは大膽なり。勇敢なり。永遠の光なる神聖を畏れざる者は唯人の前のみを畏れて人の前のみ虚飾して眞實を語るの勇氣なく、有りの儘に語るの勇氣なく諂曲にして唯或一面のみを表示するも常に裏面を陰覆す。其内面の漏れん事を恐るゝ故に活氣無く行爲に生命なく他人をして其精神の那邊にあるかを疑はしむ。自ら他人をして疑はしめ忠實に義務を盡す能はず。

正直に事實を表白するの勇氣なき時は其意志を薄弱ならしめ果斷力を鈍くし其成さんとする處成功するなし。

神聖は眞理なり。眞實は神の聖が人の精神に顯れたるものなり。故に眞實には無上の威力あり。如何なるものも侵すべからざるの威力あり。斯光の前に抵抗する者な

し。虚偽は如何に猛烈なるも唯虚勢を以て世を虚喝するものなれば眞理の光現はるゝ時は忽ちに其勢力は消滅せん。虚偽は眞に勝つ事能はず。邪は正に勝たず。此眞理は萬古不易の理にして不斷の眞理なり。

### 眞實の不斷光

方便なる虚構を用ひざる爲に處世上大に失敗したりと謂ふなかれ。眞實にして失敗するの理なければなり。人の處世上の成功と失敗は一時の上に定む可からず、終まで終始一貫して始めて最後の勝利を得るものなり。

不斷光の眞實は感情の昂低常なきものに非ず。至誠神の如くなる忠直公明正大秩序整然として私に犯す事無く表裏なく隠顯なく眞理の光を以て己を制し表は温にして内に強く外は柔和にして内は勇敢なるは即ち眞實なり。

宇宙の眞理の光を以て自己の精神とし常住不斷に自己の心意を支配し精神に神聖正義の日月双び照して不斷の言語動作作法に至るまで眞實なるものは終局眞理の至善の靈界に進み其極むる處、即ち佛々平等の圓滿至善の佛果なり。眞實に一貫せよ。念々亦眞實なれ。最後の勝利として成佛せん。

### 不斷光の正義

神聖は眞理の光として眞實心として神の命令として眞理の標準として善惡を明かに照し分つ。而して其光明によりて善惡邪正を明かにし即ち吾人が心に邪と惡とを捨て正善を擇びて就かしむるは即ち正義なり。

神聖の光なき時は邪正を知見する能はず。正義なき時は邪を捨て正を取るなし。正義は消極的には邪惡を捨て積極には正善によりて本務として益々向上的に至善に向つて進趣するにあり。

抑吾人が邪惡なるものは何よりするや。吾人は心變なる本心と肉の我とあり、肉

我が肉慾と我慾を満足せんとする私情より起る心意は邪惡にして心靈の光 明より心意を衝動して發する我は正善なり。

四四

正義の消極的方面なる邪惡を捨てては克己心と勇氣と無かる可からず。正義の觀念には道德的の義務觀念あり自己を高等に向上せざる可からず。正義は一定の標準に則り自律的に己を制裁し公明正大なる判官として我慾を制し神の命令として私心を伏す。自ら責任を有する我は人なり、神の聖旨を被りたる人なり、一切の惡を制止して一切の善の行爲を果すべきの人なり。

### 消極的不斷光

不斷の意志の圓滿に發達せんに決して他人に依頼し又は自然の時の到るを待つて達せんと欲する如き薄弱なる勿れ。自己の意志は自己自ら鍛練し自己を制し自己を克するの本務あり。自己の本城を嚴護するものは自己なり。自己に潜伏せる心靈を顯動するにあらざれば自己を尅し自己の光を發する能はず。意志自由圓轉滑脱自由不斷の活動をなさんと欲せば克己推勵によりて得らるゝものとす。

正義の妨害者は我なり。此我意が心靈の光を覆ふて暗黒に墮落せしむ。我なるものは專横放恣自分勝手にして得る限りは唯肉我の慾を逞うせんとす。專横放恣動物欲の強者伏弱、殘害剋賊奢肆驕縱、肉の快樂を恣にせんとす。

されば聖典に都て義理なく法度に順せず奢淫驕縱にして各快意せんと欲す。心に任せて自恣にし更相に欺惑し、心口各異に言念實なし。倭諾不忠にして言を巧みにし媚び諛ひ、賢を嫉み善を諷して怨枉に陷る。各貪瞋痴を懷いて自ら己を厚うし多く有らん事を欲す。尊卑上下同じく然りと。斯く横恣の我意の爲に全心を横領せらる。斯る我意私情に打勝つての意志を克己とす。我意横暴、岐路に入り秩序宜しきを得ざる意馬を調御して正當善良即ちあるべきやうに克復せしむるの謂なり。斯横暴なる心中の賊を征服せんと欲せば其賊の所在を明察し賊の巨魁を捕縛し之を征伐せざ

四五

るべからず。此賊をして恣に其行爲を縱す時は己を素へ崖畔に陥らしむる事を免れず。人の精神が智力と感情と意志とに於て智力は教育の結果大に進みたるも智力に偏進するの傾あり、學校に於ても社會に於ても智力的に偏り、智情の偏進の結果神經過敏となれり。心意動き易きは自己を修練せずして唯智識のみを進めたる故也。宗教意識に於ても自己自ら修行の結果自得する處あれば自信力強し。自信力強ければ果斷力又強し、果斷力なきものは勇なきなり。自己の一切の智情意を統一して己を調御するは克己なり。克己は智力と感情を支配して自己に隨はしむ。己に剋つて禮に復ると云ふも己に克つて聖光によりて不斷に活動せよと云ふも相同じ。

四六

### 眞 勇

一時名譽とか或は一の感情に刺戟せられて發するの勇は眞勇に非ず。百般の成功は如何なる場合にも貫徹する勇ありて始めて成るものなり。深奥なる意志の不斷光より湧き出す勇氣にして如何なる困難にも他の妨害にも驚かず恐れず常に泰然自若として自己の目的を達すべし。自信と一の目的に向つての不斷光は是無限の勇氣の原動力なり。人は深奥の意志の底より鍛練したる勇氣を要す。

不斷光の活動を掩ます屈せずして聖意を實現するものは勇氣なり。邪を伏し正を顯すものは勇氣なり、聖旨を斯身に實現し光明赫々たる人格圓滿たらんとするは聖旨を理想とし此理想を實現する者は實行なり。

人如何に聖旨を以て理想とするも大なる義務を有し責任を果さんとするも遺憾なしに之を貫徹せんとするには勇猛不撓の意志なかるべからず。此勇氣の缺乏せんか、逆も自己の抱負を貫徹し得る能はず。

如何なる事にても勇猛に不斷の精進に實行する時は何事か貫徹せざらん。身匹夫より出でて能く其の目的を達したるものは概して勇猛精進の結果ならざるはなし。大海の水を汲干して如意寶珠を獲んとする因縁の如く、假令大海の水と雖も勇猛精進

四七

にして屈せざらんには必ず汲み盡すとの鞏固なる意志が如何なる事情の中にも如何なる場合にも屈せず撓まず貫徹したるが即ち心靈界の獨尊たる釋迦牟尼を化現したるなり。意志薄弱にして其の發足したる事業を中途にして枉屈する如きは全く意志勇氣の原動力たる不斷光の缺けたるより出づ。勇氣に蠻勇あり真勇あり。暴虎馮河の勇は蠻勇なり。良心即ち光明の示現に隨つて自己の私欲を抑へ果斷決行するの勇は真勇なり。大敵にも恐れず小敵にも侮らざるの勇なり、真勇は己が我愆の敵を征げて而して如何なる事にも恐れざるなり。獨立不羈の勇なり、自ら善なりと信じたる事は縦令身命を賭しても貫くの勇なり。願を發し所願を力精し、縦令身を諸の苦毒の中に止むとも我行は精進にして忍んで終に悔ひざらんとするの勇なり。

### 克己の終局

我意精進、真理の光なき我意が恣に横に勢力を逞うするの此我意に對て動物欲望及び感情とを靈性の光明にて鍛練し指導して真理の目的に歸せしむるに、感情及び動物欲望を專横ならしめざる様にすは即ち不斷光による克己なり。他人に對して理窟に克つは難からず。己に克つは賢者にして能くす。自己の横恣なる貪戻に克ち私情の憤怒を制服し高慢心に打勝つ。實に克己を以て最後の勝利を得んと欲せば常恒不斷に意を制し感情の爲め忽卒にも憤怒を發しまた憤怒を制するの勇氣無く、常に熟考の光明缺くる時は漫りに場合の刺戟の爲に心を動かされ己を制伏するの暇なく、竟に煩惱の爲に敗を取る如きは全く不斷光の周到精密なる用意を缺き平生の充分の覺悟なき爲なり。

教祖釋迦牟尼が人の精神に伏在する處の惡魔を征服するが即ち克己なり。魔に五陰魔煩惱魔あり。五陰魔とは色即ち此肉體の慾を満足せんと欲する處より發る魔。此肉體は飽くまで幸福を欲望するものなり。受とは感覺欲即ち五塵の境界に對して眼の欲耳の欲の爲に障られて正しき道徳行爲を妨げらる。感情の喜怒哀樂の爲に正しきを障

らる。意馬心猿調伏しがたくして道業を障る智力の奸智と點慧は自己の少き生智慧の爲に眞智を障る。是等を五陰魔と爲す。斯る魔障は皆我に屬するもの。斯る身と意との活動を制伏するなり。佛敎の戒法は法性の理に隨順して我愆に克つにあり。陽明が山中の賊は破る事易し心中の賊を破る事難しと。即ち自我が肉我を適當に支配し感情智力等すべて自我の命令に順ふにあり。

克己の眞義は斯光によりて自己の邪見邪思專横なる我意を征服しては、如何に征服せしやを自己に返照し、其非なる不可なる所を排して、正當にあるべき様に實踐躬行するにあり。克己が缺くるならば如何なる勇者智者も又一世に冠たる偉人と云はるゝも竟に肉慾の奴隸となりて自性の光を失ふものなり。

經に帝釋の帝位天に赫々たるを赫かすも情欲の爲に使役せらるゝを免れず、と。すべての虛榮心又肉欲を制伏せる克己心の最強きものは釋尊なり。故に釋尊を世雄と號する事は克己心に於て最も強き者の謂なり。

歷山大王の大覇業ある大王も女色の爲に捕虜となり、楚の項羽の豪勇無比なるも婦女の爲めに自ら情を制すること能はざるは專横放逸の私慾に左右せられて之を克するの眞勇氣乏しが故なり。精神健全一世に雄たる勇者も一朝事情の爲に油然として煩惱の勃起するや曾て圓滿完全たる豪傑を以て目せられたる精神も端なくも根本的に打破せらるゝに至るは何ぞや。智力と感情の爲に勇者たりしも全く克己心の完全を得ざるが爲のみ。此に於ては釋尊及び其徒諸の比丘衆の如きは實に克己心に富める者と云ふべし。

不斷に侵す可からざる靈光が心の奥に赫々として光りつゝあらば我欲の爲に敗は取るまじきものを。專横の我が尅たんと欲せば正見正義の光を要す。妄見邪想の邪欲の起り來つて己を襲はんとするは正義を無視し自己の人格を自棄し唐らに自己の肉慾を充たしめんとして起るもの、其結果は自己の光明を害し自己を害するに至る。

人の克己の道を講じて失敗する所以は斯光を輕視し德行の獨立を危くする故にして其罪歸する所己にあり。自己返照して宜しく改革すべし。人一旦私欲横恣となり正義も德行もなくならば曾て晴快青天の如きの心中も闇憊として精神の慘憺たる無明にさまよはん。眼も眩み事理の正否を見る事能はず、邪思邪行、自己の感情の煩惱は屢昂低し判斷の正鵠を失し、歸する處一生空しく肉の奴隸と成り已らん。

入斯の正見斯の光明によりて正道を踏むに自己の目的誤れるを認め正當の方向に轉向せしむるは肉體の生活に何ら直接に關係なきを以ての故に無益の如くに考ふる者有らんかなれども決して然らず、是人間に生れ人間の本分を盡すものなり。自己の品性を發揮し人格を高尙にし人生を完全ならしむるは人生の一大事也。世界人類の大模範者大師と仰がる者は最も圓滿完全に正義の旗を立て邪念邪思に克ちたる大元帥なり。此の人類の大師に倣ひ其の軌範に順はずんば是眞の人にあらざるなり。若し正々堂々正義を以て私欲に打ち克たる師者は何人も敬服せざるなし。

大正十五年一月二十日印刷  
廿五日發行

同  
誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)  
年十二冊二圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成  
發行人

東京市小石川區荻荷谷町九八  
印刷人 小林 七太郎

發行所 東京市小石川區水道橋二ノ四四  
ミオヤのひかり社

編發東京六八五一番